

6-6			
主題	自立支援について介護職員の意識改革と、全ての利用者の声から発信されたミニクラブ実施までの取り組み		
副題	自立支援の第一歩		
キーワード1 自立支援	キーワード2 なし	研究(実践)期間	24 ヶ月

法人名	社会福祉法人 至誠学舎東京
事業所名	東京都板橋区立特別養護老人ホーム みどりの苑 通所介護
発表者(職種)	徳江久美子(生活相談員)
共同研究(実践)者	南方千穂(生活相談員)、鈴木裕子(介護職員)

電 話	03-5994-5926	FAX	03-5994-5929
-----	--------------	-----	--------------

今回発表の事業所やサービスの紹介	平成2年開設、公設民営にて開設当初より社会福祉法人至誠学舎東京が運営し、平成18年からは、指定管理者として引き続き当法人が運営をしている。(現在、一般通所定員35名 認知症対応型通所介護12名×2ユニット 計59名定員)利用者本位の介護を行うために施設全体で職員の育成にも力を入れている。
------------------	--

《1. 研究(実践)前の状況と課題》

取り組みを行うまでは、「利用者の為に」「安全重視」という名目で、すべての事柄に於いて介助を行っていた。また、職員間のミーティングを行う際には「利用者の出来なくなっている事」に目がいく事が多く見られていた。「自立支援」とは遠く離れたところで利用者との関わりを持っていた。

利用者の中で昼食後下膳を手伝う事に対して、職員間で「危険ではないか」「出来る事はやってもらう」等意見が割れていたことがきっかけになり、利用者にとって介護保険でうたわれている「自立支援」とは何か、何でもやってあげることが介護なのかという課題に取り組むこととした。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

まず、職員が介護保険の「自立支援」をどうとらえているかを確認し、アセスメント時は利用者の「出来る事」に着目し、介助に対する意識改革を行なう。さらに利用者の能力に応じた介助を行う事で、「やれる事」を発掘し、利用者主体のデイサービスへの変化を期待した。

《3. 具体的な取り組みの内容》

まず、職員が介護保険の「自立」を目的とする介護とは何かを考えるために、利用者に対する職員の着目点について、「出来なくなっている事」ではなく「やりたい事」に目を向けるようなアセスメントの取り方に変更。

12ヶ月をかけ、1から10まで援助する介護から、やりたい事・出来ている事に着目した援助が出来るよう、職員の意識を改革した。

職員の支援の方向性が一致したところで、利用者に向けて、自立支援を根拠に意識改革のアプローチを始めた。

12ヶ月をかけ、3ヶ月に一度（一週間）、テーマを「今やっている事・出来る事・今後やってみたいこと」をテーマに、利用者全員との懇談会を開始。

最初は「なんでサービスを受けに来ているのにやらなければいけないのか」「ここにきてまで手伝いたくない」等否定的な言葉が多く聞かれていたが、懇談会を進めていく内に（主に昼食時の配膳や下膳・クラブの準備など）「自分の事はやれる。」「（自分のことを）出来ない人がいたら手伝う。」「言われればやる。」等の意見が出始めた。

「偏りが出ないように、当番制にするのはどうか。」との意見が多く出るようになり、「花の水やりをしたい。」「茶道をやってみよう。」「お花なら教えてあげられると思うけど」等の「今後やってみたいこと。」の意見が多く出るようになった。

意見の中から「茶道」や「華道」に関しては、若い頃習っていた利用者も多く、実現できるのではないかと職員間で意見が一致した。利用者の中から協力者を募った所、それぞれ師範やそれ以上の資格の利用者が名乗り出てくれた事と、当施設と他事業所に通っている利用者から、「他の所では、私がお菓子作りを教えているのですが、此処でも教えて差し上げてもいいですよ。」との言葉があり、職員と共に企画から関わって頂く事とした。

《4. 取り組みの結果》

職員が利用者の「できる事」に着目したアセスメントを取れるようになり、利用者主体の「和菓子作り」「茶道」「華道」のミニクラブが発足。昨年の4月から始動し、2ヶ月に一度ではあるが、定期的に行われている。

1日の様子を見ても、利用者が積極的に他の利用者と協力して、物事に取り組む姿が多く見受けられるようになった。また、利用者同士の新たなコミュニティが生まれている。

《5. 考察、まとめ》

職員間でもアセスメントや記録の際、「出来なくなっていること」よりも「今できている事」「出来る事」に目を向けられるようになったことは、通所全体での職員の意識改革にもつながったのではないかと思う。

利用者との懇談会により、利用者が普段職員に対して言えない心の声を聞くことができ、より利用者の事を理解できたと感じている。

今後の課題に関しては、今後は自立支援に対する考えに対して、柔軟な発想が出来る職員の育成が必要である。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人（ご家族）に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

「月刊デイ」（2015年11月）(株)QOLサービス出版部

《8. 提案と発信》

現在の介護の現場は職員個々の力量に頼っているところが多く、職員の高齢化も現実問題として抱えているところも多いのではないかと思う。若い方が、「介護職に就きたい！」と思えるような環境・賃金制度などを整えることが必要なのではないかと思う。